

未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

第6回 開拓の村の商店街…生業

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

中島 宏一 (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



開拓の村の市街地群には旅館や蕎麦屋、酒造に万屋、写真館に染物屋など、商店が軒を連ねるエリアがあります。今回はその一部を紹介します。

1 近世の建築様式をつたえる駅前旅館

開拓の村の入口である旧札幌停車場を抜けると正面に建つのが旧来正旅館です。来正旅館の創業者、来正策馬は土佐藩山内家の御典医の子として現在の高知市内に生まれ、1891(明治24)年に屯田兵として永山東兵村に入植しました。策馬は屯田兵退役後、永山村役場に勤務するかたわら、1898(同31)年8月に開通したばかりの天塩線(現、宗谷本線)の永山駅前に待合所を開業しました。永山駅が開設されたことにより、永山より奥地の当麻や愛別などから木材伐り出し人夫や旅行者たちを乗せた客馬車の往来が激しくなり、策馬はいち早く駅前に待合所を開業させ、通過客の取り込みに期待したのでした。

1918(大正7)年、近くを流れる石狩川等の氾濫で旭川と永山地区は大きな被害を受け、来正待合所も浸水して営業ができなくなりました。そこで策馬は、待合所の機能を残しながらも旅館を併設した旅館を以前

と同じ、永山駅前に建設しました。この建物が開拓の村に移築、復元された旧来正旅館です。

建物の特徴として、屋根に据え付けられた2つの天水桶があります。この天水桶は、江戸期以来の旅館建築(旅籠屋)には一般的に見ることができました。元々は、付近に火災が発生したときに類焼を防ぐため、その水を貯めておく防火用水桶の機能を果たすのが目的ですが、実際にはいつも水が貯まっているわけではないので、「防火への心得をきちんとしていますからご安心してお泊りください」という、信用を誇示する目印だったと考えられます。

また、2階客室の外側に縁側に相当する廊下を設け、ガラス戸はすべて一方の戸袋に収納することができるようにして開放感をもたせています。この戸袋は相当重厚な造りになっており、漆喰塗りの壁には入母屋の壁と同様に、㊦という印が書き込まれた看板の役割も果たしていました。この戸袋も、江戸期以来の旅籠屋建築の影響を残しているといえるでしょう。

来正旅館が開業した1919(大正8)年、旭川には177の旅人宿(旅籠)と135の木賃宿がありました。いずれも全道第1位の数で、旅人宿の宿泊者数180,920人も同第1位でした。なぜ、旭川に旅館の数が多かったのか。それは、鉄道網の整備に伴って旭川が道内の東西南北各地からの物資の集約地となったからです。さらに、札幌にあった陸軍第七師団の旭川移転が決定して、1902(明治35)年にすべての移駐が完了すると、旭川の発展に歯車をかけることになりました。



屋根の天水桶が特徴的な旧来正旅館

ちなみに、当時の北海道の街の形成は、近世以来の街道沿線に町が形成されていた本州方面と異なり、政策上鉄道を整備しながら開発を進行させ、鉄道開通後は大規模な人の移動が行われ町が形成されていきました。旭川には倉庫業が発達し、商業もまた活気づくことになりました。旧来正旅館と隣に移築復元された旧近藤染舗（1913（大正2）年建築）は、旭川発展の草創期を示す遺構といえます。

2 小樽に多かった蕎麦屋さん

旧三河本そば屋は、小樽市の旧市街地にあたる信香町にありました。創業は1897（明治30）年で、1909（同42）年に新店舗を建設しました。この新店舗が開拓の村に移築復元された建物です。小樽の市街地にあって、地域の会合や各種の宴会の場として欠かせなかった蕎麦屋の様子を蕎麦の調理道具など各種の展示と客間によって示し、2階には客用の座敷が大小5部屋あり、それぞれ襖を外せば大きな部屋になっておよそ50人の客が入ることができました。

港町小樽の市内中心部には40数軒もの蕎麦屋があったといわれますが、最近では後継者不足もあって閉店する店が目立ってきました。その中で現在、最も古い歴史を誇るのは「一福そば店」で、1894（明治27）年の創業です。近くには1877（同10）年創業の「越中屋旅館」があります。小樽駅近く、静屋通りにあるのが1954（昭和29）年創業の「藪半」です。「藪半」の店舗奥座敷は、青山家、茨木家と並ぶ祝津三大ニシン漁家の一人、白鳥家の別荘の石蔵を転用しています。

釧路市に本店を構え、全国的にも有名な「竹老園東家総本店」の歴史も小樽に始まります。

旧越前藩の下級武士だった伊藤文平が、息子の竹次郎と共に小樽で夜鳴き蕎麦屋の屋台を始めたのが1874（明治7）年で、その後、入船川畔に東家の前身となる「山中そば店」を1877（同10）年前後から1887（同20）年にかけて開業します。竹次郎の経営によって繁盛した「山中そば店」は1897（同30）年に「東家」と

屋号を変え、その後、函館を経て1912（同45）年に釧路で店を構えました。釧路で東家は評判を呼び、当店で修業を積んだ弟子たちが次々と暖簾分けをして独立し、道内各地に「東家」が広がりました。

さて、三河本そば屋本店は1986（昭和61）年に店を閉じますが、河本家は本店の目と鼻の先で「小町湯」という温泉銭湯を経営していました。「小町湯」は1882（明治15）年以前に開業した古い銭湯で、河本家が1903（同36）年に経営を引き継ぎましたが、惜しくも2021（令和3）年10月末に閉業してしまいました。

3 ニシンそば

北海道のお蕎麦屋さんのメニューによく見かける「ニシンそば」。その歴史は北海道から始まったと思いきや、実は歴史は京都中心部の四条通、南座に隣接する「松葉」という蕎麦屋で1882（明治15）年に出されたのが始まりです。北海道で獲れたニシンはよく乾かして「身欠き」に加工され、それが京都に送られていきます。京都の「松葉」さんでは、身欠きニシンを箸ですくうとほぐれるくらいまで柔らかく煮て、そのニシンを温かい蕎麦で覆って提供されます。

4 シングルスラントを持つハイカラな写真館

旧広瀬写真館は、岩見沢第1号の写真館として1898（明治31）年に開業した同館を再現した建物です。この建物の特徴は、2階にある写場（スタジオ）のシングルスラント（片流れガラス屋根）で、これは写場に外光を取り入れるための手法です。明治30年代になると各地で本格的な写場が建築されるようになります。当時でも間接光を用い、斜め45度からの片光線による採光が主流で、ガラス張り天井も写される客とカメラを結んだ線に対して並行な斜めの片屋根式が最良でした。方向は北側斜面をガラス張りにするのが最も望ましく、これによって日光が照っている時間は均等な光が写場に注がれました。開拓の村に再現されたこの建物のスラントの角度は55度で北側に向き、日中は明るい陽射しが写場に注ぎます。



旧三河本そば屋内部（厨房）



河本家が経営していた銭湯「小町湯」



旧広瀬写真館写場（スタジオ）

明治期の写真館は、函館で1869（明治2）年に創業した田本研造、1872（同5）年創業の武林写真館が先駆で、その後、都市の発展に伴い、写真館は道内で大いに発展しました。この頃開業し最近まで営業していた写真館では、明治30年代に開業し、2006（平成18）年に長い歴史を閉じた栗山町の「紫明館」などがありました。

そもそも北海道における写真の原点は函館にありました。1858（安政5）年にロシア領事館が箱館（現、函館）に設けられると、領事館員が写真技術を市中に広めました。初代領事のゴシケヴィッチは写真の大家で、医師のゼレンスキーも化学者として写真技術をもっていました。この2人から写真技術を習得したのが箱館に住む木津幸吉、横山松三郎、田本研造の3人でした。木津は1864（元治元）年に北海道最初の写真館を箱館に開業した後東京に移り、横山は横浜の下岡蓮杖の門下生となって、後に上野（東京）の不忍池近くに建てた「通天樓」を拠点にして日光や旧江戸城を撮影するなど、大きな功績を残しました。そして田本は終生函館に住み、北海道の写真を撮るとともに多くの写真師を育てました。田本は、写真に興味関心が高かった第2代開拓長官の東久世通禧と出会い、以後、現在「北海道開拓写真」として残されている多くの記録写真を撮影したことでも知られています。

夜間撮影に成功したのは、1892（明治25）年、札幌に写真館を開業した信伊奈亮正です。信伊奈は、1901（同34）年に「札幌農学校創基25周年記念演武場イルミネーション」（北海道大学附属図書館蔵）を撮影したほか、1911（同44）年に自ら開発し特許を取得した「新写真撮影装置」で、翌年9月13日深夜に行われた明治天皇の大喪の礼を撮影しました。

5 円山の床屋さん

旧山本理髪店はハイカラな建物の床屋さんで、正面の窓の棧を見ると「円山、円山…」と読むことができ、この建物が円山にあったことがわかります。この

建物が建っていた札幌市中央区南1条西24丁目付近は、通称「裏参道」と呼び、大正末期から市街化が始まった地域です。1924（大正13）年札幌電気軌道（現、札幌市電）円山線の開通、札幌温泉、後楽園遊園地、円山公園、そして札幌神社（現、北海道神宮）等をひかえ、札幌の新しい住宅地として開発が進められました。

建物の内部は、大正期に流行した回転椅子や木炭を使用するタオル蒸し器、各種理髪用具などが展示され、人形が語る年末の円山界隈の話題とともに、当時の町の理髪店の雰囲気再現されています。

2013（平成25）年、この建物が「理容遺産」に認定されました。理容遺産とは、歴史に残る理容関連遺産を大切に保存し、文化的遺産として次世代に伝えることを目的として、全国理容連合会が認定するものです。旧山本理髪店は、理容館アラタ（鳥根県大田市）、業祖・采女亮碑（長野市善光寺境内）、本郷喜之床（博物館明治村）とともに、理容遺産第1号の認定を受けました。

6 スイーツ王国北海道の中心

北海道開拓の村にある菓子屋「旧大石三省堂支店」は帯広市内電信通りにあった建物を再現しました。三省堂はさんしょうどうと読みます。大石三省堂支店の創業者、大石泰三の父、菊松は明治から大正期にかけて札幌で菓子店「うずまき大石三省堂」を営業し、菊松の子たちは帯広に移動して、長男が本店、支店を三男の泰三が経営し、本店は甘納豆を、支店は最中看板商品としていました。

帯広は、小豆、甜菜、小麦、牛乳などの産地で菓子類の材料が入手しやすいことから菓子業が盛んでした。帯広における菓子店の始まりは1893（明治26）年とされ、1912（大正元）年には同地方における最初のパン屋が開業しました。その後、1915（同4）年までに大石三省堂本店など11店の菓子店が開業しました。札幌千秋庵から暖簾分けした「帯広千秋庵」が開業したのは1933（昭和8）年で、同店は1977（同52）年に「六花亭」に改名して現在に至ります。



旧山本理髪店正面窓の意匠



現在の帯広電信通り



菓子の木型（旧大石三省堂支店）

大石三省堂支店があった電信通り商店街は、JR帯広駅から北東の約1.5kmに位置し、1954（昭和29）年創業の「高橋まんじゅう屋」や洋菓子店「克蘭ベリー」などの菓子店が現在でも数多く店を構え、市民に親しまれています。同商店街は1883（明治16）年に晩成社開拓団が付近に入植して自然発生的に形成され、当初は「晩成社通り」と呼ばれていました。1897（同30）年10月に帯広と大津（現、豊頃町）間の電信が開通した際、帯広で初めて晩成社通りに電信柱が立ち、これを機に名称を「電信通り」と呼ぶようになりました。電信通りから東方の町名は、晩成社を率いた依田勉三にちなんで「依田町」と名づけられています。

さて、開拓の村の旧大石三省堂支店には菓子の木型が展示されています。落雁^{らくがん}を作るための木型の多くは、2年間自然乾燥させた樹齢80~100年ほどのサクラ材で作られます。菓子作りには多くの道具を用いられ、中でも菓子の木型は人々の願いや思いを反映する大小様々な形で表現されています。祝いの型では、古くから鶴と亀は長寿にあやかる動物とされてきました。扇は末広がり、鯛はめでたい、海老は腰が曲がるまで長生きするように、言葉や姿にも縁起を担ぎます。松は樹齢が長い常緑樹、竹は勢い盛んな生命力、梅はいち早く春を告げる農作の道しるべといった縁起ものの木とされ、祝い事の型となっています。

7 人が集まる地域で酒造り

旧武井商店酒造部は古宇郡泊村で酒造業を営みました。ここでは、1895（明治28）年から酒造を始め、新潟県出身の杜氏が「松の露」と「玉の川」の2銘柄を醸造し、1944（昭和19）年まで酒造りに^{いそ}勤しみました。当時の北海道の酒造りは人が集まる地域で行われました。武井家が店を構えた積丹半島の泊村は、ニシン漁と炭^{にき}鋳で賑わった地域です。

明治の初めは、北海道に移入される本州産の酒は一旦函館に入り、そこから問屋の手を経て奥地へと運ばれました。そのせいか、本州産の酒は値が高く、明治初期から小規模ながら酒造を行う者が道内でも多くなっていました。地酒造りは、回漕業や呉服雑貨商を営む商人の手で兼業として始められ、1890（明治23）年には道内で330以上もの酒造元があったといわれる

ほどです。明治20年代には小樽、札幌等では乱立気味となり、同30年代になって専業の地酒業者が確立するようになりました。

北海道の商工業が活気づき、地場産業として自主的な動きを見せたのは、日清戦争（1894~5）から日露戦争（1904~5）前後でした。小樽、札幌、旭川の酒造業者が工場の規模を拡大して量産体制に入ったのもこの時期で、大正期にかけて増産を繰り返していきました。しかし、大正末期から昭和初期にかけての不況によって企業合同の機運が高まり、1928（昭和3）年に1869（明治2）年創業の札幌酒造^株ほか計8社が歩み寄り、現在の日本清酒株式会社（札幌市）が設立されました。

この頃、余市町ではウイスキーの生産も始めています。1934（昭和9）年、竹鶴政孝が余市町に大日本果汁株式会社を設立してウイスキーの製造を開始しました。後のニッカウキスキーです。ウイスキーは原酒ができるまで4、5年かかるので、当初は余市産のリンゴを原料にした「ニッカアップルジュース」を作って販売しました。ニッカウキスキーが市場に姿を見せたのは1940（昭和15）年のことです。

現在、北海道には日本酒を醸造する蔵元が15ヶ所、ワイナリーは53を数え、さらに地ビールやウイスキー、ジンの蒸留所が各地で展開されています。

ところで、泊の武井家は酒造のほか、大規模なニシン漁場と茅沼炭鋳を経営し、同家の軒先をかすめるように敷設された日本初の軌道が茅沼炭山の石炭を港まで輸送していました。茅沼の石炭は帆船で函館まで運ばれ、外国の蒸気船に利用されました。この石炭輸送用の帆船を建造したのは函館の名士^{つづきとよじ}続豊治と成豊父子で、成豊とは日本初の官業による気象観測を手がけた福士成豊です。この件は^{くだり}次回にお話したいと思います。



旧武井商店酒造部工場内部